日常

夕焼け

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
日常

【Ｎコード】
Ｎ５４３１Ｚ

【作者名】
夕焼け

【あらすじ】
あの戦いから１７か月。
一護が、死神の力を取り戻した。

（前書き）

時間軸は完現術が終わって、一護が死神の力を手に入れた2日後から始まります。
目線はたつきです。

「おっーす。一護。」

「おっす。たつき。」

いつも通りの朝。
違っているのは。

「久しいな。たつき。」

「久しぶりだね。朽木さん。」

一護に死神の力が戻って2日目の朝。
朽木さんはひょっこり戻ってきた。
違うところと言ったら髪が短いってとこだけだけど。

「お早う。黒崎君。朽木さん。」

「お早う、井上。」

「お早う・井上。」

答えが全く同じ。
というか、織姫は何で朽木さんが居ることに驚きを感じないのだろうか。

「黒崎。お前、仕事は？」

「はっ？仕事？」

この返事はあたし。

高校生が朝学校に来てすぐに仕事って。

普通可笑しいよ？

「もう、終わってるって。てか、浦原さんがやってくれたみたいだ。」

「そうかい。それじゃ、僕は生徒会長の仕事があるから。」

「おう。」

あー。

浦原さんって確かあの、帽子をかぶった下駄のおっさんだったな。

なぜ、此処であの名前が。

「おい、一護。チャドや啓吾・水色はどうした？」

「はっ？んなの知らねぇよ。霊圧探ったらどうだ？」

確かに。

てか、ドアのとこにいるんだけど。

「もう見つけた。」

「あっそ。」

…。

えっと。
何個か疑問がある。
1　なぜ、此処に朽木さんが居るのか
2　一護の仕事とは何か
3　一護がなんとなくいつもと違うのはなぜか
「ねぇ、一護。何個か聞きたいことが…。」
「っ？授業が始まるから昼なぁ。」
「……分かった。」
何かあっさり返された。
というか、何故そういうところだけ真面目なんだ。
＊＊＊＊＊
昼休み
「それで？聞きたいことって？」
いつもの
一護・朽木さん・織姫・石田・チャド・啓吾・水色・そしてあたし
メンバーで昼食を囲む。
「えと。まず、なんでここに朽木さんが居るの？」

人差し指を立て、聞く。
一護はキョトーンとした顔でこちらを見る。
「聞いてなかったか？」
そして、ズボンのポケットから死神代行戦闘許可書・通称、代行証を取り出し死神になる。
「おれ、５番隊の隊長になったんだぜ。」
目の前には、黒い死覇装の上に白い長そでの羽織を着ている一護が立っている。
背中にはあの時と少し違う刀が背負われていた。
「！！」
あたし・啓吾・水色の身が驚きの表情を取る。
「わぉ。本当に聞いてなかったんだな。てっきり、井上から聞いていると。」
「このことは黒崎君の口から言うのがいいかな～と思って。」
「ま、それもそうだけどな。」
自分の体に戻りながら一護は言った。
一護が死神になったっていうのは織姫たちは知っていたんだ。
だから、朽木さんが来ても驚かなかった。

「んで、ルキアは俺の副官。つまり、5番隊副隊長。」

購買のパンを頬張りながら話を続ける。
一護が隊長で朽木さんが副隊長で…。
うん。分かったような分からないような。

「でも、俺は高校生だろ？だから、副官共々来たってことだ。」

「ふーん。」

でも、どっちもこっちに来たら尸魂(あっち)界の5番隊っていうのが機能しなくなっちゃうんじゃないかな。
でか、朽木さんが副官ならその前の副官はどうなったのやら。

「尸魂界はどうなの？」

「5番隊のことか？」

「そっ。」

あたしは疑問をぶつけた。

「大丈夫だよ。たまにルキアは尸魂(あっち)界に戻ってるからな。」

「ふーん。」

そんなもんか。

「じゃ、現世(こっち)の虚とかいう怪物は一護たちが片づけてんの？」

「雑魚はルキア担当だけどな。」

「なんか、アフさんは？」

「戻ってもらった。はっきし言ってアイツ居って居ないのと同じだから。」

へー。

啓吾はサラッと酷いことを言っている一護を見たまま答えた。

「朽木さんが５番隊に来たらもともと居た、（と思うけど。）副官はどこ行ったの？」

あたしはもう一度、一護に疑問をぶつける。

疑問に思うことは全てぶつけるのがあたし流だ。

「雛森のことか？」

「いや、名前言われても分からないんだけど。」

「まっ、そうだな。…あいつは１３番隊に言ったぜ。」

雛森っで誰よ。

名前を言われても死神なんか朽木さん以外は面識がないのだからんなこと言われてもわかんないのに。

「ふーん。」

細かいことは今度聞こう。

今は時間がない。

「い、隊長。」

「なんだ？」

うっ。

朽木さんが一護のこと隊長って呼ぶのなんか新鮮。

「虚の大群です。」

「はぁ。たつきぃ。」

この場から立ち去ろうとしていたあたしは階段の前で止まりいつも通りの声で答える。

「なに？」

「次の時間俺たちサボるわ。」

「はっ？何言って…。」

「あれ。」

一護を含め、もうこの場にいない啓吾・水色以外の皆が屋上から空を見上げていた。

あたしもつられて———というか、一護が？あれ？って言ったからっていう訳もあるけど———上を向く。

そこには虚の大群が見れた。

なるほど。

納得だ。

「分かった。」

「じゃ、後でノーと見せろよ。」

「分かってるって。」

「サンキュー。……行くぜ。」

一護以外が二つ返事で返事をし戦闘が始まる。

これが、いつもの日常。

普通になっていった。

（後書き）

はぁ。
なんか変になった。
というか、短編書くとなんか書き方が可笑しくなっている気がする。
気のせいかな？

感想、お待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5431z/

日常

2011年12月18日10時50分発行